

研究発表要旨

なぜ Abortive がそこにいるのか—*Paradise Lost* における愚者の楽園の描写を巡って

江藤あさじ

John Milton (1608-1674) の叙事詩『失楽園』(*Paradise Lost*, 1674) の中で、地獄へ失墜した Satan が、自分の失墜後に新たに作られた人間の世界や人間の営みを見るために地獄を抜け出して荒涼とした世界を彷徨うシーンがある。その広大な宇宙さながらの世界で Satan がある場所に到達する。そこは後に「愚者の楽園」(Paradise of Fools) と呼ばれるところであるが、Satan がここを通過する際には、まだ誰も足を踏み入れてはいない。したがって、Satan の目には何も見えていないのである。それにもかかわらず、Milton はこの場所の描写に 50 行超を費やし、未来の姿を我々読者に見せている。ここは一見、ダンテが『神曲』に描く第 1 層辺獄 (Limbo) や、アリオストによる『狂えるオルランド』の愚者の楽園を彷彿とさせが、それらはともに、そこに一定期間とどまることで、最後の審判後は永遠の至福が約束されている者が死後に住まう場所だ。しかし『失楽園』の「愚者の楽園」はそうではない。Milton は、『失楽園』の愚者の楽園の住人達には至福の楽園行きを約束しているどころか、むしろ最後の審判後には dissolve されてしまう運命を課している。果たしてミルトンが『失楽園』に「愚者の楽園」を描いた目的は何なのか。本発表では、いずれやってくるとされる「愚者の楽園」の住人達や、彼らが「愚者の楽園」に現れる様子、そしてその最後の姿に着目し、Milton が敢えてここで描写している目的を明らかにしたい。

『ユドルフォの謎』の迷路—恐怖の根源

植月惠一郎

〈迷路〉をキーワードに、『ユドルフォの謎』(1794) の〈恐怖〉を探ってみる。ゴシック小説群の嚆矢は『オトラント城』(1764) で、超自然的な要素がふんだんに盛り込まれており、たとえば冒頭で、巨大な兜が突如落下して来て、世継ぎの王子が下敷きになるような点だ。だが、のちにオースティンが『ノーサンガー寺院』(1818) で揶揄するラドクリフのこの恐怖小説では、たしかに〈謎〉の現象が次々と起こるのだが、それはまるで〈迷路〉に迷い込んだための〈恐怖〉であって、ウォルポール的、超自然的な原因とは異なり、理性的説明が可能なように思える。『ユ

ドルフォの謎』の〈恐怖〉の正体とは、いったいどのようなものなのを探ってみる。

本発表では、具体例として 3 卷 1 章を精読し、ヒロイン、エミリーがどういうところに〈恐怖〉を感じているのか、そこから始めてみる。増改築を重ねたユドルフォ城から出られそうで出られないヒロイン、エミリーの行動、心理的起伏などを中心に読み解いてみたい。〈迷路〉に迷い込んで、自分の現在地がわからない不安、それが高じて行って〈恐怖〉が産出されていき、最後、すべての〈謎〉が解明された安堵感は、〈迷路〉から無事抜け出た達成感にも等しい。こうしたプロセスを丁寧に描いたのが『ユドルフォの謎』なのだ。